

(注二) 本文の右に鹿児島県立図書館蔵『天誅録(拾遺)』の校異を細字で記した。「天誅録」は「庄内軍記」の異称である。どうしてこのように「拾遺」の表現が異なるのか、詳にし得ない。

(注三) 成田守『盲僧の伝承』(昭和六〇年一月)の第四部「資料編」所収のものを底本とし、萩原秋彦編千田幸夫注^{解注}『薩摩琵琶歌集改訂版』(昭和四一年九月)所収のもの^{解注}の校異を細字で本文の右に記した。

(注四) 越山正三『薩摩琵琶』(昭和五八年六月)の「個人篇」中村四郎太の項による。猶、^{解注}『薩摩琵琶歌集改訂版』には「作者にはいろいろと他に説もあつてはつきりしない。」とある。

(注五) 卷之三十五、敷根の薬師堂の項と財部の龍虎城の項。

(注六) 鹿児島県立図書館蔵の写本を底本とし、同館所蔵「小笠原蔵書」印のある活字本^(変体仮名を使用)の校異を細字で本文の右に記した。この活字本は大正五年発行の活字本とも少異がある。

(注七) 松村緑『少年姿』解説」の指摘による。

資料の利用をお許し頂いた鹿児島県立図書館、都城市立図書館に厚くお礼申しあげる。

る、迄に快く、年を経つるも束の間よ。牡鹿の角の秋を傷み、巴峽の猿の断腸も、吾愁嘆には優らんや。兎ても角でも清家大人。一同年同月同日に、生れずとも同年、同月日に死なんづ。——と、豫は盟候ひき。卿あへなく為給ひて、何樂に阿容阿容と、憂に得堪へぬ空蟬の、命を長く繋ぐべき。やがて追付進らせん。いざ。——とばかりに涙を拂ひ、鼻打かんだる勇士の決心。死後にも人に笑はれじ、と、思ふものから姿を繕ろひ、一鞭あつれば奔馬の駿足。稻麻の如き賊中に、面も振らず衝入りて、従横無碍に馳回る、心は矢竹、氣は張弓。此處に戦死せんもの、と、一心籠めては却に、姿に似合はぬ奮勇絶倫。身に立つ矢をば抜きもせず。裏缺かれても衰へず。遮莫其身は少年なり。心の勵にかくありしも、霎時こそあれ、身も疲れ、騎たる馬さへ疵を負ひ、矢庭に撞と伏轉べば、主も得堪へず礮と落つ。隙間を得たりと前後の賊兵、岌よりか、って打下す、幾十口の亂刀に、鎧はあへなく斫碎かれ、さと迸る血烟の、夕榮残る遠木立。山寺の鐘の音凄み、無常は誰と薄昏の時に歸る鳥自物、あはれ冥途に急行く、是や平田が身の終末。書きは綴れどいとゞしく、筆も澁れば書く文も、にじみがちな墨の跡。見よや今宵の夕景色。只聞く無情の笛の聲。はた断腸の媒灼と、為ると知らずや月澄みて、梢に寒き嵐吹く。(明治十八年、十月中旬、月影清く照れる時、此文を書綴りぬ。)

ちかごとのはずゑのつゆをくだかねば、

きよきこゝろのたまもみえけり。

「平田三五郎宗次」は筆写回覧本『我楽多文庫』第四集(明治一八年十月発行)に「二幅對美少年姿、第一対右」として掲載されたものである。「馬琴ばりの七五調」^(注七)であるが、「新體詞華」という角書の通り、美妙はこれで叙事詩を狙ったのである。叙事詩の試みとしては、明治十五年十月に発行された、湯浅半月の『十二の石塚』に次ぐものである。

「略傳」から見て「賤之麻玉記」が資料となつて見られるが、美妙が述べている通り、「宗次の愁嘆」、平田三五郎の「心に思ひたる處」が一つの眼目になつてゐる。吉田、平田の仲を三五郎の愁嘆にからまる回想で描くところは巧みと言って宜からう。吉田大藏の死体の描写や平田三五郎の戦死の描写は例によつて凄惨な筆遣いである。これが第二の眼目であろうか。第三に、……、——の記号を使つて、目で探していることや心内語、会話を示そうとした新工夫を挙げねばなるまい。

右に見てきたように、平田三五郎は時代を越え、場所を越え、文芸の種類を越えて、材料を提出して来たのである。『賤之麻玉記』が薩摩の威光と共に東京で読まれたという僥倖もあるが、このような人物は郷土の人としてはそう多くあるまい。

(注一) 鹿児島県立図書館蔵本を底本とし、都城市立図書館蔵本の校異を細字で本文の右に記した。

も亦戦歿しつ、生死を同にと盟ひたる其言の葉を全くせり。時に宗次は十五歳、清家は廿六歳なりしとぞ。○文中清家死せし後、宗次の愁嘆は長々しくして、千軍萬馬往来する急忙の折には、似合はしからざるに似たれど、意は唯其心に思ひたる處のみにて、之を寫出だすに於ては、文おのずから長からざるを得ず。例無き事にも非ざれど、よくも見ざらん人のために、蛇足の辯を費すのみ。

賊も味方も入亂れ、おめず怯まず戦ひたる、處は大隅財部城 おどろおどろと鳴響く、小銃の轟、鯨波の聲。四方を包む硝煙の、雲もろ共に立迷ふ、馬蹄の塵の砂烟。空は曇れど曇なき、日影に晃く劍さへ、いとど鋭き丈夫が、進む前後に飛来る、彈丸の霰も流石に、後へは退かぬ武士の道。碎けて消えん。いざ、らば、君に報ふる一片の、心はかくよ。梓弓、折れても名をば射留ん。と、先を争ひ揉立つる、亂軍危急の其中に、恐れも得為でゝめる、三五ばかりの美少年、其名も平田の三五とて、流石に縁ありあけの、月恥かしき顔に、問はでも夫と白妙や、卯花色に威したる、鎧を着つ、頭には、故意と兜を被らずに、白練衣の鉢巻し、貝鞍置たる黄月毛の、六歳駒に打騎たる、天晴優き打扮よ。扱愛らしき武者態よ。と、賊も味方も見惚らすまでに、交情も吉田の義兄清家が、前には賊に囲まれし、其後如何になりけん、心一に料匠^かね、踪跡を索望みたる、折から吉田の若黨なる、佐藤兵衛武任は、其處に平田が茫然と、いま

んとも知らなくに、何やら肩に引掛けて、陣屋を指して歸る途、此体裁を見るよりも、其儘傍に馳來り、||平田様か||と問蒐けし、聲に顧る三五郎、||這是武任か。勇ましや。清家殿は何處に||……と言ひつ、件の武任が、擔ぎし物をよく視れば、紛ふ方無き清家なり。然も全身は寸斷々々に、斫りさいなまれし血汐の紅、見るに目も暮れ、心も消え、堪らへず馬より飛下り、轟とばかりに抱附く姿にと、武任も、忍匠^かねたる涙を拂ひ、||申すも愁嘆の種ながら、料らず深入し給ひて、賊に全く取囲まれ、霎時は防給ひしかど、御運の盡にや程も無く、重傷を負はせたまひつ、其處にあへなき御最期||と、告ぐる言葉を聞くからに、いとど愁嘆は増鏡、涙に曇る胸の月、||修羅の街に臨むなる、世に武士の身にあれば、嘆くは女々しき事ながら、然りとては又情無や。年来日来兄上よ、吾弟よと睦ましく、血筋も及ばず契りしも、思へば夢か、幻か。有為轉變は常なりと、豫て聞きしは此處なりき。偕も兄上、清家大人。はかなき姿に為給ひし。陣屋を出づる其砌、||唯世に俊れし功名を、為給ひてよ、為給へ。必身をば輕佻しく、名も無き端武者の手に罹けて、空しく死にな給ひぞ。||と迭代に手を取合ひ、誓ひし言も今ぞ知る、今生後生の暇乞。いふて甲斐無き事ながら、今目前淺ましく、血汐に染まる御姿を、見れば身も世もあらぬまで、また昔さへ忍ばるゝ。他人ながらも最優き、御心根に料らずも、結ぶは露か玉櫛笥、二人が中は膠漆、其陳雷も數ならじ、世に罕なり。と人々に、言は

開明の道学者固よりこれを取らず法律亦た禁ずる所なりと云ふと雖も其の義を重んじ氣を尚び生死渝らず相誓ふて文武を奨励し力を國家に尽すが如き彼の輕薄者流の利を見て義を忘れ禄の爲めに節を失ひ軟弱卑怯自ら甘んずる近世人士の風に比すれば大に取るべきものあり、且つ其の事たる封建時代の諸雄藩の人情風俗を徴するに於て甚だ益あるを覺ゆ、近日都下負笈の書生中亦愛読玩誦の余密に印刷に付して同窓の士に相頒つゝの挙ありと聞く、然れども其の部数僅に数百部に過ぎず、其の及ぶ所知るべきのみ、予輩深く之を憾む、因て貴社の余白を借り普く天下同好の士に示さんとす、貴社若し談の陳腐と事の不倫なるとを以て之を放棄するが如きことなく幸に好武尚義悲壯の風に於て取つて以て余白に填する所あらば余輩同窓の士の感喜これに如くものあらんや

このような事情から印刷されたのであるが、『賤之麻玉記』が紺足袋党の硬派書生に愛読されていたことは坪内逍遙の『三歌當世書生氣質』や森鷗外の『キタ・セクスアリス』の描くところである。

さて、『賤之麻玉記』の冒頭部で庄内の乱における吉田大藏と平田三五郎の「ためし少き」心ばせを紹介した条は「形見の桜」と同様に二巻本『庄内軍記』の表現が利用されている。一連の平田三五郎物語の中で『賤之麻玉記』の特徴を言えば、平田三五郎、吉田大藏の「少人道」を中心にしたものということになる。「少人道」を描いた作品と云えば「雪折り竹」との関係が氣になる。内村半平、松嶋三五郎、奈良原清八

の名前も出て来、「雪折り竹」と同工異曲の感じが強いが、両本の関係は詳にしえない。同じく詳に出来ないものに先述の「伊勢殿若衆文」との関係がある。冒頭の語句が一致していて関係はありそうのだが、「拾遺」に引用されている部分が『庄内軍記』に対して大きな特徴があるという訳でもないので、判断する材料に乏しい。

七

最後に明治十九年十月に刊行された山田美妙齋著の『新体少年姿』の「第一、平田三五郎宗次」を見て、この稿を終えることにしたい。

略傳。平田三五郎宗次は、薩摩國、島津家の執權職なる平田太郎左衛門尉増宗の嫡男なり。いまだおきな外おきなき齡ながら、文武二道に志厚く、其性剛毅なるものから、同く島津家の家臣にて、弱年ながら近國までも、頗英名を轟かしたる吉田大藏清家てふ壯士と、同氣遂に相求めて、料らず兄弟の義を結び、生死を共にせんと盟ひしより、二人常に相離れず、文を勵み、武を磨き、をさをさ他事も無かりしに、慶長四年の頃かとよ、伊集院源次郎といへる者、故ありて君を怨み遂に居城都城に楯籠り、十二の砦を築構へ、謀叛の色を現せしかば、君よりも討兵を向けて討伐あり。されば清家も、宗次も、偕に軍に召されつ、十二砦の一なる財部の城に向ひしに、合戦頗烈くして、賊味方の死傷數知れず。彼の清家も今迄に、數度の軍を經來りて、事馴れたる者ながら、意に叶はずや、果敢なくも、戦没したるを見るからに、宗次の愁嘆は言ふべくもあらず其儘賊中に突入りて、是

見れは宗次は卯花威の鎧着て態と申は召ささりしが嬋娟たる顔に髻鬚たる髪ノ毛の鎧の袖にはら／＼と乱れか、りし有様はさなから楊柳の春風になひく風情也、清家を尋兼たる有様にて、忙然として立給ふ、武任打見て、宗次さまと問ひければ、清家はいかに、と宣ひければ、はや打死、と答へける。こはいかに、と、あさましと馬より下に飛て下り其ま、死骸にいたきつき發露涕泣し給ふか、よし／＼今は力なし合戦に隙なふしておくれしこそ無念なれ今は今生の對面是迄也武任さらは、と云ひ捨て又馬に、打乗則敵陣に懸入て忽ち古井原上の草葉の末の露霜と消果玉ふ、そ痛はしけれ、哀成る哉宗次は今年漸三五の年拾とせ余りの春秋は唯一時の胡蝶の夢覺て義を知る武士の弓矢の道程世の中にわりなき者はなかりけり、情／＼是を觀するに春の朝の花の色一陣の風にさそはれて秋の夕への紅葉々の一夜の霜にうつろひてあたに散り行風情より猶はかなくぞおぼへける、そも／＼宗次いかなれは未壯年にも不至すしていかなれは斯迄、弓箭の義を励み終、死趣きけるにや、されは朱にましるは赤く墨にましるは黒しといへり、宗次苟も武文二道の清家になれ、契ひし事なれば忠孝廉直剛義なる吉田か氣風、おのつから宗次似たるそ理りなれ、嗚呼人として其禽獸に異なるは唯是義あるを以て也、義の大源を守らずんは誰れか鬼畜に遠かるべき、宗次は未だ幼きといへとも義を知て義を守る故に終に佳名を千載に残し其遺跡乾坤と共に不朽して末代勇士の龜鑑たり、今の世の人も少年

達もいふまでもなし若手の武士の輩は必文武の士になれて契ひを結ひ玉ひ宜しく忠孝を重んじて義を見て常に勇あらは誰れか清家宗次が昔しの心におとるかは、後世男色を好まん人唯々色道にのみ沈溺したとり死生の交り有ども忠孝の武ツを打忘れ信義の心なかりせば今川義元の三浦における武田勝頼か土屋を寵せしとき大ひ成れるは國家を亡ぼし小なるは身を破る是そ勇士の浮沈のさかい恐ても又慎むべし、蓋し此卷折にふれ事に付、後に壯士のもて遊ひとならんは能く／＼心を留て見玉へかし、恐るべきは倉田小濱が始終又恥べきは石塚等の奸計偏にしたふてもまた恋ふべきは平田吉田が義理の契ひ彼清家か腕を透せ、事こそ父母の遺體を毀ふて非義に似たれども義殺より發する所なれば亦傷む事なき也、唯其色道よりして見る時は取るに足らすといへども義理よりおして見る時はいかてか我師あるの益ならん乎

くりかへしこゝろをとめて見るに猶道のおくしる賤のおたまき
變らじと互ひにかはす目の業の誠を照らす鏡とやせん
 迷ふなよ色のふかきは紅葉々の散て朽ぬるならひあひとは

『賤之麻玉記』の明治十年代における愛読の状況については、自由党系の小新聞『自由燈』に連載された(明治一七年七月一九日〜八月一六日)時の断り書きに詳しい。

是一編は往時薩藩及び諸雄藩に於て壯士少年が膾炙伝承せし所の一奇書賤緒環てふ書にして壯士吉田大藏少年平田三五郎の義談艶話を綴りし物語なり、抑も男色の事は造化自然に悖戻したる行事にして

書て其下に

命あらはまたも來て見ん米山の薬師の堂の軒端あらずな

清家宗次感嘆して、彼六七は過し年高麗昌原のえに虎にかまれて死したりける勇猛無双の勇士なるかな 哀也筆の跡程末の代迄も残る形見はなし、と心に感涙袖をしぼりけるか、さらは我等も今度の合戦は千に一ツも生て帰らんとは思はし、とて清家やがて矢立を取出

し則堂の右の柱に、時に慶長四年己亥六月十日平田三五郎宗次吉田大藏清家共に庄内に趣き一戦旅、と書付てこそ立出ける、後に彼兩雄か戦死して其身は苔の下に朽野外の土となりぬれと佳名は死後にと、まつて末の代迄も残りつ、見る人袂をしほりへす、実にや龍門源上土埋骨不埋名とはかゝる事おや申すらん

財部之城合戦の事 吉田平田討死之事

爰に伊集院甚吉と猿渡肥前守が楯籠る隅州財部の城といふは拾式城の一ツにして逆徒の張本忠真が居城都の城より西に當つて其間僅に一里にすぎず、又忠真が股肱の臣白石永仙と伊集院五兵衛尉等が楯籠る安永の城を隔てたれば在陣の勢共は寄て攻る手段あらず、是より隅州濱の市へ一筋の山道有り、義久入道龍伯公は富の隈の城におはしける 公御賢慮有つて途中渡瀬といふ所に新関を居へて敵の襲ひ來るを防かるべしとて一陣を構へて市成隼人助武重兄弟に命せられ彼御陣を守らせらる、亦財部白尾の峠よりも一ツの通路有ければ爰へは伊地知周防守君命を受けて相守れり、しかる にかの兩陣え

敵の兵共襲ひ來て小せひ合度々に及ひしとかや、かゝる所に秋の末つかた龍伯公の命に依て山田越前守有信入道理安其日の大将を承て自ら三軍の機を司り 財部の城を攻にける、既に巳の刻より手合して寄手秘術を尽して攻立れば城方とに武功の者共にて爰を専度と 戦ふ中にも忠真か家臣に瀬戸口石見といふ者は屈竟の鳥銃の上手なるか緋威の鎧を着て岸の小松を楯に取詰替へて寄來る敵を射たりければ味方の勢共左右なく近付得さりしに讚良善助某を見射て十奴の鳥銃を放ちて射たりしにあやまたす石見が真中を射通しければ倒に倒れて岸より下に落とすとす、長曾我部甚兵衛尉走來て石見を取て引上ケ味方の陣に助け入れんとする所をあひもすかさすまた打鳥銃に長曾我部か腰に指さる團扇をみぢんに射碎きたりけれどもものともせず石見を助けて本陣に帰りしは天晴勇々數見へにけり、是を軍の初として敵味方互に入乱れて巴のことに切通れは十文字の如く蒐立る、天地を動す吐きの聲は山岳も是か為に崩れ射ちかふる鳥銃の音打合ふ太刀の鏗音は唯今天地もさくるばかり也 味方平田仁左衛門尉宮内治部等討死す、其外兩方諸共に手負死人は數知れず、爰に吉田 清家平田三五郎 はいつも互に寄り添ふて引も驅るも兩人は形に影のしたごふ如く毎度手柄を躪はしけるか今日も今朝より諸共に一ツ道にと心さし兩人列れて進まれしが合戦にひまなふして心ならずや押隔てられ清家終に討死す、老人当千の部等に佐藤兵衛尉武任彼の死骸を肩に掛ケ味方の陣に引退く、後ろを

世の中過し高麗出陣の砌には、再び今斯く二度違はんとは思はざりしなり三五郎か節義の

誠大藏か忠志の実を天道偏に憐み玉ひて再び逢ふたりけんか、今の
兩人か心の中嬉しきは唯く昔しの仲算かみとせ馴れにしその人
に別れて跡をしたひ終にかの仙童と再會せしその喜びも中く、是
には過しと覺えける、されは誠は天の常、誠有る事人の道、彼両雄
か節義の誠万古の後に諸人の称嘆するの余りには雪ふみ分て清家か
平田か宅に差越せしその倂をうし得て忠信節義の鑑みとなし跡を
しとふそ忝き、末の代なから人心昔を感する習ひにて諏訪某といへ
る人かのうつし画を見られしか懐古の心おもひの余り、過し昔をし
のばれて宗次の心に替りてよめる哥かくを誦しける

死なは別れ生ては何を報はましゆきはけてこし人の誠を

夫より清家宗次は昔に増る兄弟組片時も側をはなれずして昼とも
に武藝を講し夜は互ひの手枕にかはす契ひはさ、れ石の岩となる迄
変らしと契るに月日矢の如く明れは慶長四年の春にも成り数年積
躰や、はれて未幾程も成らざるにまたこそ一ツの大変到来せり、是
は世の家老職たる伊集院右衛門太夫忠棟を故有て伏見の茶亭に誅し
玉ふ、其子忠真居城都之城に楯籠拾貳の砦を構へ、仇を太守公
に報はぬ、と企之由風聞まちく、也ければ其真偽明かならされ共夫
より三州騒動して上下の沸かごとく万民手足を置處を知らず、中
にも若手の勇士あはれ忠真籠城せよかし音にきく、内村半平、
を手取にせん、と勇み立早出陣の用意せり、彼石塚十助は三五

郎宗次におもひを掛種々に奸計をつくせ共終に其事ならざりうちに
吉田大藏帰朝して彌増の式人か契ひ、いかゞともする事も不叶して
空しく月日をすぐせしに今度庄内籠城の風聞有之ければ彼忠真に縁
有る者にていそぎ都の城に走行てやかて伊集院方にそ成にけり

庄内一揆籠城之事清家宗次出陣之事

去程に伊集院源次郎忠真は老父忠棟が殺れし事を憤り都の城に楯
籠り仇を太守公に報したてまつらんとて早拾貳の砦をかまえ日隅
州の通路を断切て反逆の色をあらはしければ龍伯公の命に依り新納
武藏守山田越前守兩太將にて外城の勢をしたかへて凶徒不虞の押へ
として日州に出張す、此事早速急を伏見に告玉へは少將忠恒公中務
太輔豊久も一所に御下向御座しける、かくて同六月上旬少將忠恒公
にも鹿兒島の城を御雷発有て日州の凶徒を征伐として相従ふ人々に
は先嶋津中務太夫家久公阿多長壽院盛淳嶋津右馬頭征久嶋津下野守
久元嶋津河内守忠信嶋津豊後守忠朝喜入摂津守忠政を初として其外
鎌田政近佐多太郎次郎比志島紀伊守國貞平田太郎左衛門尉増宗等の
諸將騎猛卒の輩其勢数万に余りければ一々しるすにいとまあらず
其勢雲霞のごとく也、扱また吉田大藏清家平田三五郎宗次も諸共
に君命に應じて出陣しけるか宗次は態と父増宗に後れて六月十日の
暁に清家宗次諸共に兄弟つれてそ出陣せり、然るに隅州帖佐を通る
とて武運の為に米山薬師へ參詣しけるに堂の左の柱に墨をおほつか
なくも文録元年壬辰二月隅州帖佐の住士帖佐六七今度朝鮮令渡海と

斯而宗次は其明の日も夕部の時分とおもふころ時刻を作て參詣しければとも目にさへみる者もなかりければ夫より毎日同じ時刻に參詣しけるに其後数度石塚等に出逢ひけれども元來宗次はおもひきつたる事にして格護の前の事なれば始終すこしも動揺せず、白眼ていつつも通りければ石塚等が輩は二度もさわる事もなく下手の分別跡からにて色々云ひて悔むとも其跡になれば宗次か勇氣に臆しけん互に我れ彼れとゆづりける臆病の程そ未練なれ、されは光陰不止早今年も亦々十二月中旬之比にも成行事に其内幾度か宗次危難の場所に出逢けれども一度も不覺を取らずして節を守りし義心の程天晴けなけの振舞也

高麗御帰陣の事 清家宗次再會 薩隅日騷動之事

扱も高麗在陣の諸將加藤小西の輩其外黒田立花毛利筑前鍋島等も初として各軍功莫大成しか中にも我君兵庫頭嶋津源義弘公は智仁勇の三徳を兼備へ玉ふ名大将なる上玉枝忠恒公御甥忠豊公ともに英材にて附従ひ奉る輩はいつれも一騎當千の者にて忠を刃の鋒先に掛ケ義を身軀の六具と成して百戦百勝武功誰れか我かきみの右に立者なし、殊に去ル十月朔日泗川新塞に於て大明の大軍式拾余万を唯一戦に皆殺し首を得る事三万八千七百十七切り捨たるは数知れず誠に前代不双の大勝利未如斯一戦に数首を得たるは聞ざる処なり嗚呼公の神妙の計是にて知るべし、智は良平か上にあり勇は関張が下にあらず軍旅の令法孫呉并ひ出るとも必公の事にしたがは

ん、されば我國の勇武英名を聞て鳴津を石曼子と呼て恐る、とかや、蓋し高麗の八道を切したがへしは全く諸軍の功にあらず、獨り我國の功とせんに誰かまた論すべき、去程に高麗御在陣前後六年にして終に八道を打従へ慶長三年冬十一月諸將各帰朝有ければ我が君義弘公同しく御帰帆まし、て三軍の士卒は筑前國今津より國に歸し玉ひ御身は玉枝忠恒公と共に城州伏見に至らせ玉ひける、爰に又吉田清家は今度高麗にて数度の勲功他にことに一度も先を掛すといふ事なく泗川大戦の砌には高名人に独歩して深く公の御感に預り世に面目をほとこせり、殊に帰朝の時節に当り椀山正綱同久高喜入忠政等の五百余人の船南海の岸に流れいたるに清家も其内に有りしか大藏竹内某と、もに節を守て当嶋に到り大守公に告て援ひを乞に五百余人を全ふしたる事ひとへに吉田竹内か功也、誠に清家か義毅勇猛賞すべく感すべし、其外義切忠勞多しといへともこと長談なる故爰に略す、猶知らんと欲せは他の諸書を尋て考べし、斯て吉田清家は極月中旬頃薩州に帰國しける折ふし此頃打続て降る雨に寒氣甚たかたかりけれども其夜に平田三五郎の宅に差越けるに互の心中おもひやるべし、過し別れの浮事も今は笑艸の種子となり清家此兩年の在陣中合戦隙なき折にしも片時も君か事のみ忘れざりしことを語れば宗次は諏訪日參の事より石塚等の事を語るに清家聞ひて嘆息して其節義をぞ感しける、其夜は清家三五郎の宅に一宿して積るおもひを諸共に語り明しける、嗚呼有為轉變の

來にけらし我君も海上無恙高麗に御着岸の飛船到來して三州中に
 其旨被仰渡ければかの三五郎も少しは心安けれども軍の勝負はから
 れず、前に増したる物おもひ宗次昼夜にやすからず余りにおもひ詮
 方なくきの餘りにやに東福か城の麓に遷させ玉ふ諏訪大明神に日參し契りし兄
 吉田大藏清家武運強くが再してひ帰朝の期を守らせ玉へと命に掛てぞ祈ける
 三五郎の宅は玉竜山のこなたにて諏訪迄の間に五六丁に過されは
 いつも独り参詣しけるかひまゆくこまの足はやくや、其年も暮行て
 明れは慶長三年には宗次今年も二七の春とこそ盛と咲花のまたこん
 はるを徒に詠め庭にすこさんは惜む人なき深山木の花の盛に殊
 ならず、爰に石塚十助は先度如法計に偽書を認めて吉田平田の兄
 弟か契る中をば隔てんとに邪棒をふりけれ共終に其事不調、彌清家宗次は無二
 の契りを結ぶときひて詮方なくも居たりしに去年朝鮮御出陣の砌は
 病氣依にて御供の人数にもれたひしが今や清家留守成りければ時を
 得たりと十助は色々おもひの文を書認めて彼宗次に送りしに宗次是
 を見て唯地上に打捨て何の返答もなかりければ夫より石塚は千度艶
 書を送れども其後は宗次一度も開き見る事なく封のま、にていつも
 焼き捨たりけるが十助はすへき様なくさまく奸智を思推しける
 にいさや威勢を以て彼を威し掛け勢を以て彼を取付んと同志の者をかたろふに
 血氣にはやる荒者ども面白き事におもひ立五六人手組して互に不意
 をうかふひしに彌生の下旬の事かとよ小雨降る日の夕暮に笠をもさ
 す唯ひとりかの平田三五郎諏訪参詣の途中にて石塚十助に行逢ひ

しが十助やがて同志の者を催ふし三五郎の跡を追追て諏訪をさしてそ差
 越しける、斯とはしらす三五郎は諏訪の社内にしばし居てきたる上
 下着直しつ、おもひはとをき高麗の軍の事を案じつ、余念もなく
 て居たりしに日も早暮れて入相の鐘のひきに打驚立帰らんと
 したりしに鳥居の側に五六人羽織をかぶり荒者共様子ありげに居
 たりしが宗次を中に追取巻き前後左右に立渡り或は石垣に切聲掛て
 当るも有、又は地上をまくるも有、宗次心中烈火の如く是石塚等の
 者ども也と事明かに推察して若も無禮をするならば何てか只におくべ
 きと刀のこり口つみはなしさわらは切らん風情にて白眼つめてぞ通
 りければ其勢ひに石塚等も流石に心や臆しけんさしたる事も仕出さず只跡
 になり先に切聲掛たる計りにて
 すわの鳥居より既に宗次の宅追付來りけるか三
 五郎はやがて内にそ帰りけり、跡にて石塚等は牙をかんで憤り、
 扱残念の事也と刀を引抜て振り扱してまた折を待べしとやかて各、
 く帰りける、かの平田三五郎は其夜つくくおもふ様、彼石塚
 等の者共威勢を以て取ひしかんと今日の如くに振舞らんよし
 彼等何拾人にもせよかばかりの奸計に恐るべき兼而清家尊兄の礼
 義の人には下る共權威を以て推す人には威勢屈する事なかれとは
 教へ給ひし事も有りきされは明日より態々時刻を作り暮時分より参
 詣してみらばや、と、彼等如きの奴原かいか成ル威勢におとすども
 最早我早我身も拾四才何そ童子に似るべきか若しも無礼を振舞なば
 式ツに成してくれんそ、と思案しける勇氣の程誠にけなけなれ、

咄を語りつ、夜も更行は諸共におなし褥のにひとつ夜着共に寐るよも是迄とかはすかたみの手枕には名残つきせん寐咄に明かた

ちかくなるかねに、時分もよし、と清家は廿一日の朝露と共に起て

そ帰りける、兼而より御出陣の時は御留主の面々帖佐に参向し御

途首途を送り奉るべしと御觸なかし有ければ其日巳の刻より清家宗

次を同道して帖佐屋形に参向し頓て大藏は太守公に御目見致し則

帳面に相付勢の揃ふを待うちに清家一所に寄り名残は多き物咄語

れとつきせん其内に日も西山にかたむく比御供の面々は各参向した

りしは尤勇々敷事ども也、公も一入御機嫌にて時雨の御旗を真先に

既に御出陣ましませは貴賤の老若男女に至る迄赤子の父母を慕

ふか如し、皆恋しとふて名残を惜しみ奉る、嗚呼公は英邁雄断のみ

か上徳は堯舜に近く下には文武周公に遠ふしとせず、後に遠人徳に

なつき囚虜帰る事を忘れしは誠に仁徳の致す所ならずして何ぞ如斯

なるべき、斯て御供の面々一勢くくり出すに猶吉田大藏は此時

に至ても一向宗次に名残有て互に側に寄添て共に別れに堪えされは

清家が郎等佐藤兵衛尉武任走來て、早公は御出陣也まませしを

左様に後れ玉ふや如何御名残多くともつきせん事候得は最早是

にておもひをきらせ玉ひ候得、と武任あなちちに諫めければ清家も

実にもとおもひいろくいわゞ猶宗次の名残たんと思案し唯何と

なく暇乞して別れんとするに三五郎、しはし、と大藏が鎧の袖を引

留め、今度異国の軍には平に忠義を重んじて目に余る程の高名し

て帰り玉へや奉待、といひつ、斯そ詠しける

武士の高き名を得て故郷にきてくる花のにしきおぞみん

清家も又取あえす

浮旅もわすれやせましことの葉の花の匂ひを袖にうつして

斯なん詠して大藏は、さらは、といひて宗次が留たる袖をふつと切

て後陣の勢にぞ加りぬ、跡に立たる三五郎は唯清家が後影を見やり

若や今度の軍にあえなく討死し玉は、今生の限りか、とおもへは

いと、せんかたなく十方に暮れて詠めやる心の中ぞ悲しさはおもひ

やるとも今更に唯其時の兩人が名残惜さはいかなりけん今の世まで

もしのばれてよ所に聞さへ哀にてしらん袂のしほるれはまして宗次

清家が互に惜みし名残の程筆に書ともおろかなり、夫より太守公は

蒲生に至り玉ふ御家吉事の鳴津雨其夜大きに降出しけるが不思議

成るかな狐火忽ち暗をてらしければ今度異国の軍を稻荷大明神の

しめし玉ふ也と三軍ひとしく雀躍せり、扱同廿三日に隈之城に致

らせ玉ひ爰に十余日御逗留ましましたけるに種子嶋左近将監樺山権左

衛門等爰に來て公に従ひ奉る、夫より久見崎に至り給ひて軍艦の

纜を解き日を経て終に高麗國に着船ましけり

平田宗次節義の事并諏訪日參之事

斯て平田三五郎宗次は吉田大藏清家に別れてより今更何となく名残

有て日々に淋しさまさりつ、起ても寐ても清家か今日はいつこ

に行玉ふらん今宵は何國にやとり玉ふらんとおもふか中に春過て夏

ければ前日廿日に三五郎斯く清家に云ひやりける

既に明日御出陣と罷成今更御名残多奉存候、唯何事も夢にて御座候、兼而御約束通今晚は此方え御出御一宿被下かし、奉待候、御事、相変儀も御座候は、為御知可被下候、此段早々如此御座候、恐々謹言

西二月廿日

平田三五郎

吉田大藏様
参人之御中

大藏則返答しけるは

両日は出陣の儀に取紛れ乍存不得御意背本懐候、然處に尊書到來御心入之程不浅忝奉存候、今晚夕方より可致参上候、随而天吹琵琶壱面致進覽候、兼々秘藏之名器折角御深愛可被下候、猶心事期後刻候、恐々謹言

西二月廿日

吉田大藏

平田三五郎様
御報

三五郎は其日の暮る、を待かねて昼より吉田か宅に差越、共に列れ立てぞ帰りけるが宗次常に秘藏して嗜みける備前兼光の名刀式尺八寸、有けるを清家にあたへて言ひけるは、此刀こそ某が命に替候ても片時も放さん秘藏にて御座候得共今度御出陣の御餞別に君に送り奉る此刀に而かならず高名をなし玉へ左あらは某も常に君の御側に添奉る道理にて候へと君も左様に思召くたされがし、と云ひければ清家取て押戴き、御志は忝候得共是等の御餞別は余り過分に候得、

と辞退するを宗次いと、打笑ひ、扱は此刀を用立んと思召かや是非不肖に候得共太守公より拜領の太刀に而愚親増宗か幾度か戦場に持出ていと吉例の刀とて某に譲り置申候されは今亦君に贈り奉るに何ぞ御辞退に及べし、と、是非、と宗次云ひければ清家、今は辞退も都て無礼に候へは、とて則受て又大藏か今指來りけるこれも式尺八寸余り有ける関之孫六兼基か打たる刀を宗次にあたへ、これは先祖代々傳來の太刀にて殊に、去年朝鮮にて数人の首を切候に水もたまらず大業物にて某是迄忝度も此刀にて未不覺を取らず別して秘藏に候得共今度離別の御名残に君に進呈いたす也もしや某高麗にて討死いたし異國の土と成り候は、是を清家か形見とも御覽候得、と言ひつゝ、鬼を欺く大藏も是を限ひとおもへは、三五郎の顔を打詠め泪くみたる有様に宗次心中さくるか如くしばし詞もなかりしが我嘆きては彌々清家かうからん事をおもひ、何にしにさ様に氣弱きはかなき事を宜ふや誰れか戦場に望む者の討死と、極めんは候はねども又敵に首尾能打勝ちて帰らんとはおほしめさすや平に某か事杯を朝な夕なにおもひ、心後れを取給ふな又某も御出陣の跡にては一向に文武を励みて折角士道を嗜べし若や今度も去年の如く両三年迄御在陣もあらば來々年は某も三五の春をまちつけて必ず渡海致すべし申さすながら軍中には唯高名をのみ心懸玉へ若も死生命有て討死し玉ふ事あらは死出の山路にまち玉へ某ひとり生残り何をたのみに後るべきやかて追付申すべし、と互に深き心中を打明し、終夜名残

腕に悪血滞り爰を通し給へ、と腕まくりして差出せは宗次、如何
 はせん、と案し煩ひけるが元來此清家は一度口に言たる事を二度返
 さん男なれば宗次、心得たり、とて彼脇さしを以て柄も通れとさし
 通せば血の流る、事瀧のこし、大藏即血判したりしかば三五郎は
 机の上成ル白手拭を取て口に加へてさつと引きき夫にて清家か腕を
 巻き、痛みは強く無御座候や、といふに 打笑ひ、何条此位の小疵
 にいたむ事の候半や去年朝鮮陣の時左の腕に毒矢を射られ其きす
 は愈候得共少し武藝にても修練の時は必悪血止てこ、地あしくも
 候ひしに今こそ腕もすがろく覚へていたみは少しも無御座候、と勇
 々しく見へて清家か何より勇む有様は氣分の程 そ勢ひなれ、跡に
 て清家宗次に、倭人共が色々いふ共夫に頓著し玉ふな、と種々の教
 訓を云ひ置てやかて別れて帰りける、其後よりは日比にまさりて兄
 弟の交りは彌深く契りける

高麗御出陣被仰出事 宗次清家に名残を惜む事

逢は別れの初とは定なき世の習ひにて今新に驚くへき事ならねども
 爰に清家宗次の連理の枝の兄弟か身の上に付てわきて哀なる事そ到
 來せり、事をいかにとたつぬれは去ル文録年間より前の関白豊臣秀
 吉公朝鮮國御征伐の事有て日本國中の諸將各朝鮮へ渡海し 武威高
 麗に轟し玉へり、既に王城を落して金鼓大明國迄振ふに我君嶋津兵
 庫頭義弘公御父子も薩隅日三州の勢を卒てこれも文録のはしめより
 渡海し玉ひ威風凜々として武功諸將に冠たりしか終に高麗 王降参

して和平を乞、時に文録四年故有て義弘公は玉枝忠恒公を胡塞え留
 め置せ給ひ御身は御帰朝ましゝて直に聚樂城に入らせ玉ひ殿下豊
 臣公に謁し玉へは殿下感悦不斜、朝鮮の勞を賞し種々の恩賜に預ら
 せ玉ふ、夫より三州に御下向有て数年の軍勞を休め給ひけり、然る
 所に高麗國王の和平終に破れて殿下再び朝鮮を征伐し給ふ故に義
 弘公にも催促して、速に高麗に渡海有べし、と命令有ければ爰に
 於て止事を得ず君再び高麗に御渡海まします事の到來して今年慶
 長二年二月廿一日に既に御途の条被仰出て吉田大藏清家も御供の
 君命蒙りければ元より望む所にして則御受申上ける、さらてたに
 平田三五郎宗次と兄弟の交り契約してより片時の間も立はなれん
 べく おもわれたりしに今度 遠く異國に渡海する事
 は君命とはいひながら花の盛の宗次を跡にひとり残し置出陣せん事
 誠にもたしかたし仕合成れとも是非に及ばん事なれば清家千辛万苦
 の心中たとえて言はん方もなし、かの平田三五郎は今度高麗 御渡
 海 連理の兄の大藏も御供の命を蒙りて不日に出陣の筈なりければ
 いと、名残ぞおし鳥の身は淵川に沈むとも譬へ火の中水の中とても
 行は一所に諸ともに契ひ置にし事なれば宗次もともに出陣仕度けれ
 とも今度は拾五 以上の御供也ければせんかたなくも人知らん心
 のみおもひくだき唯何事も手につかすひたすらにおもひ 此上なから願ふ所は出陣の一日にても延引あれよとおもふより
 外はなし 早廿一日には 出陣の御途にて各帖佐に参向の賦なり

やあらん若亦某が二心なるの心中 證拠もあらば見せ給へ、と言ふに宗次
 無念× 弥意恨におもひ兼へ兼な 彼偽書の手書を清家に見せ始終を語りて、證拠
 は是に明也て しかるを様々輕薄して二心なしとの追従をいかてか信
 し可申斯迄不義の貴公と知らず是迄兄弟の契りを致せしこそ思へ
 はいと、くやしけれ此一書にても猶申分の候や、と格護覺悟× をしてこそ

清家が只膝元にひたと詰寄て若大藏か一言間違の事あらば直に突か
 んと構えたり、清家猶も動揺せず、儲も武士たるもの、此位のことには驚を起し
 事の実否

聞定めす何を血氣に早り給ふや某夕へより御目に不懸昼も□出成さ
 れ候折留守にして唯不都合の折からに何共しれん落書の奸計に御
 疑ひなされ候事某も君に不審を掛奉る彼又加納氏は先日より病氣

の由夫に某何をか約束いたさんや殊に夕へは我宅に被參候との事跡
 かたもなき空事也又某か心中は兼て左こそと知玉はんに此段の事を
 察し給はんこそ心得ぬ某は外に曇りの候はねは申分とは候はず、

と義の當然之清家が 返答に宗次今は道理に伏し、扱血氣早りし、と
 後悔の色あらはれて只何とも詞なくして居たりしかは重て清家云ひ

けるは、兼ても君は某か心の程をしり給はんにかばかりの姦計に事
 を寄君と我とは義絶して其後君は唐衣重て義士と千載の契りを結び

玉はんとて斯は被仰候哉其儀ならば某も外に格護覺悟 の候、といふをき
 くて三五郎はいと、泪にくれ行て唯清家にすかりつき、某君と兄弟

の契ひを結て今更に何を不足に梓弓矢竹心をひるかべしいかてか二
 心をぞんずへき先の詞は某か血氣にはやりて一向君を疑ひ奉り誠

に後悔至極也、と花の平田か実情に涙なからにかき口説く 清家い
 と、感しつ、幼き心に斯迄に義を重んずるそ本意なれ、と漸宗
 次をなため置乍此上兩人は後の世かけて変らしと、誠を神に誓ん
 とて起證文をそ認めける

起證文前書
 一 忠信孝義武士道之儀は第一之事候条相嗜べき事
 一 此節兄弟之致契約候儀に付而は自今以後生死可共事
 一 此以來何様之訳有之候共殿様は格別其外に忘恩移愛不可有二心
 事

一 小事にか、わり兩人の間互に疑不可起事
 一 何色に不寄不律義の儀有之候は、互に加異見可申聞事候条到其
 期疎意有間事
 右慶長二年丁酉二月よりケ條之通申合候儀別条無御座候
 若於相背者

梵天帝釈四大天王日本國中大小之神祇不殘別而當國鎮守加志久利
 大明神國分正八幡大菩薩霧嶋六宮諏訪上下大明神其外家之氏神
 尊々神罰冥罰各可罷蒙者也、仍而起證文如件

慶長二年乙酉二月八日 吉田大藏清家判
 平田三五郎殿

三五郎も同案を認めて血判して清家に渡せは大藏も、いさ血判せ
 ん、と脇さし抜て宗次に向ひ、幸なる哉日比に武術稽古の積りにて

そ幸なれ持て行かん、と清家の宅に差越けるに折節清家留主成ければ宗次空しく立帰りいか、おもはれけん先の手紙を取出し封押切て見られしに

昨日は罷出致長座御禮申上候、扱彼一議平田氏には御咄御無用に奉存候、人目もしけき世の中、密々之儀第一に候、猶今晚得御意委細可申上候、恐々謹言

二月八日

加納某契弟

吉田大藏尊兄

猶々御約束之弓は後程取寄差上可申候間左様思召可被下候

三五郎は見終て齒かみをなして、扱は大藏殿我を見捨玉ひ加納氏え心変する、人の心と川の瀬は一夜に変わるといふ事もあれと武士の一度不変と契り置しに何故に替る心の恨みしやケ程に不義の人ともしらす是迄契ひしくやしきよもふ此上は我も又命生て何かせん大藏殿と諸共に死して止るより外はなしされと亦我も一度兄と頼み置たる事なれば先清家に義絶して兄弟の交を断ちてこそ其後兎も角もすへき也、と心一途におもひ切て則一書を認めける

最前は罷出候得共御留主の故以手紙致啓上候、然れば無摺申上度儀御座候間此方え御出可被下哉、御宅え可罷出哉、何分御帰次第御返答可被下、此段早々得御意候、恐々謹言

二月八日

平田三五郎

吉田大藏様

如此書て吉田家え遣しける跡にてひとり三五郎はいと、意恨に堪兼て此間清家より貰ひしとて天吹を別して秘藏なりけるを取出して吹かんとし、けるにいか、こ、ろの乱れけん脇指抜て真武ツに切折返す刀に机の角を三刀四刀切たりしか猶もおもひに堪へかね、小座の柱を続け打に切聲掛て撃たりしに怒れる眼に涙をふくみいと、恨し有様は誠に宗次のこ、ろの程、そこわりすぎて哀れなり、彼又吉田大藏はかゝる事とは夢にも知らず、夕へより親類の事に付用事有て夫故宗次の宅にもゆかす今朝も早天より立出て漸く暮時分に帰り宗次の手紙開き見ていと、不審におもひ、一刻も早く行てたつねんと則平田家に差越して清家宗次に打向ひ、昨夜より用事の義に取紛れ不能、貴顔候得共自ら今晚は参上之考にて候処遮ての御手紙忝存し、常にましたる真実に宗次聞いていよくにらみ儼然と席を改めて扱清家にいふ様は、最前手紙を、上し事別義に候はす貴公を是迄、兄と奉頼、候得共存する子細之候得ば最早是より義絶して長く兄弟の交を断に、候得は左様御心得被下度事の子細は貴様の御心中に候半、と芙蓉の眸恨みをふくみ花の顔いとたけく齒切をなして白眼つめたる有様に大藏おもひかけなき事なれとも則様子を推察して少しも騒かす、扱は某か心中に二こ、ろ有かと疑ひ玉ひ、左は仰られ候歎愚也三五郎殿此清家、鉄石はたとひ天地か変わる共武士の一度詞を替して誓ひし事をいかてか何にしに忘れ申べき察する所是は佞人どもが君と我との其中に邪棒を振るの工みにてきみに告たる者

と、はかなき云ひければ宗次はいと、こまりせけたる顔に紅葉していなやの詞もなかりしが心計は哀れ也只か、る勇義の英雄と義理の契ひを結ひつ、互に士道を嗜みて言ひつ諫めつ励みなば武士の本意と兼而より清家が勇義の程を思ひしたふて居たれども流石それとも云ひがたく色見て君に知れかなとおもひ兼たる有様にて唯清家にうち解て心の内は最上川とれば下る稲舟のいなにあらざる粧ひは譬へぬかたもなしの木の花にうるをふはるざめや、軒の玉みつ人も静まる折なれや清家今はこらへかね柳の風によられぬる風情に似たる三五郎を唯後ろよりしつとたき燈火ふつと吹消せはやみはやなし梅の華袖に匂ひのかほり來て色杜見へん夜の雨窓うつのみそ音してそ静まりかへる小座の内おもひもつれし恋の名を掛けてそ解る雪のはだふれて契ひおそ結ひける、只其折の清家が心の中のうれしさはたとへていはぬ方もなし、斯てよりして大藏は日比の鬱念一時に散し英氣他日に百倍して樂しき事におもひつ、文武二道を諸共に互に言ひつ諫めつ励せは聞人みる人ごとに羨まざらんはなかりけりされはあたる世の習ひ吉田平田の両雄、好み深さを妬みつ、奸智を工む人多堂宮杯の柱にも彼兩人が事を種々のおとけに樂書しまたは二人をあしさまに色々言ひはやしけれとも清家宗次の兄弟は更に屈する色もなく日々に契り増ら雄か互に義理に勇みけり

三五郎大藏 疑て欲義絶 兩人起證文之事

縁有る時は千里是か為にあへり、縁なき時は肝膽故越の如しといふ

り、彼平田三五郎は三州中に亦なき紅葉也ければ千万人よりも恋ひしたわれ中にも倉田小濱が如き強悪至極の無意氣者も有て千変万化して責けれども終に落し得さりしに、いか成天運にてや吉田大藏清家は其身勇義の徳により高根の花の三五郎を折得て手には入れたり縁有て只一責に攻落したやすく手に入れたりし有様無縁そ不思議なれ、是は悪聖の、天の時は地の利にしかす地の利は人の和にしかす、と説き玉ひしは彼れは兵の道なれ共理よりおして見る時は何れの道も皆然り、去れは清家宗次は骨肉ならん兄弟と成てより互に交りいと深く彼、哀帝の龍衣の袖を断切らせ給ひし昔の契りはおろかにて朝な夕なに唯二人出るも入るも伴ふて武術稽古に身をゆだね昼夜を分たす励せはこゝろ有る面々は是を見き、て左杜有こそ武士道本意ならんと感する族も多かりしに佞奸至極の小人どもは嫉妬の余りにて邪棒をたくむ其内に石塚十助といふ者幾久敷、宗次におもひを掛けて居たりしに不計に三五郎大藏に打摩き今は誠の兄弟同前二世不乱に契る由彼石塚聞付て嬉さはかぎりなく種々に邪棒を企て吉田平田の兩人か契る中をば隔てんと兎さま角さま案んしけるに一ツの姦計を、おもひ付、二月八日の事なるか一通の偽書を認めて平田家の門の前にそ落し置たり、斯とも知らず三五郎は其日清家の宅に行んとて立出られしに宗次は彼手紙にはこゝろもつかす打過ぬるに家来、目早く見付て則拾ひ宗次に見せければ上に吉田大藏様加納八次郎と書たり、宗次打笑ひ、吉田殿に行折に此手紙を拾ふこ

ともなしとおもへはひたすらに我身なからもあちきなやよしや恋死
 するの[×]かはりに^は 思ひの程を君様に明して[×]若も叶わすは腹かき切て
 死な^せすん事申^く今^の思ひに勝る也、と獨こ、ろに案思^{思案}して忠も義
 も有るますら雄^がの、ろ吉田の清家か恋の道には斯^迷込に思^入ひ極めし
 ける[×]社^ははかなけれ、比は正月^のすゑつかた^{吉田} 大藏^{清家は} 三五郎の宅^はに行
 かん^とてもし^もやおもひの叶わすは二度家に帰らしとおもひ切てぞ立
 出ル名残を惜しむ庭の梅袖にかをれる香をかけは猶^もそ恋しさいやま
 さる君の宅へとさし越^にしける、彼又[×]平田三五郎は未志學の年にい
 たらされ共父の増宗教戒して文武の式ツをはけみしか藝に遊ふの暇
 には天吹を深く愛して常に吹てそ慰みける、斯而吉田大藏は暮時分
 に三五郎の家^宅に來^至り天吹の音のきこへければ是にかんじ^{聞きとれて} 誰か
 吹そ、とひそやかに垣のひまよりのそきしに恋しとおもふ三五郎か
 小座の戸口に唯ひとり縁の柱に寄掛り庭に植木の梅の花雪かとまか
 ふ白妙の暮の気色を詠めやり暮る、も知らて天吹を^{餘念もなげに} 吹たりけ
 る其有様は中^くに筆に書共いかてか^は 及び^がたく^ぞ 見え^にけり^る 清
 家不覺切聲を掛ケたりければ宗次いか^何 おもひけん急に天吹をふ
 きやめ内へ入らんとしたりしが^には大藏則言葉を懸ケ、三五郎様、と
 問ひければ宗次答へて、誰か^と 答へける、清家門につと^差 入^{りて} 吉
 田大藏にて候、といふをきくより三五郎は縁より下に飛下り^{嗚呼珍しや}
 大藏さまにて候歟^やいさや是へ、と進めつ、共に内へぞ入^ににける、斯
 而清家宗次は一ツ二ツのあいさつも心有^けけにみなせ川深き思ひは

諸共に色に、出さぬ燕子花おもはん^ぬふりの物咄包とすれと中^くに
 あまる色香の眸^眸に引しめ見しめ自ら互に心恥か敷とも^にせけたる有
 様は^{吉野の} 春に立田の秋紅葉桜をこきませて一時に見るの心地せり、
 其後いか成る序にか清家宗次に云ひけるは、最前の天吹は天晴奉感
 候今一曲吹て御聞せ候得、といふに三五郎いと、打こまり、某か未
 た得吹かん^ぬ天吹を存のほかなる仰かな貴公様こそ一曲御ふき被遊候
 へ、と机の上なる天吹を取て清家か前に差置は清家再三辞しけれ共
 是非、と宗次のそまれければ今は辞するに詞なく、さらは、と取て
 是を吹、其比大藏は名高き天吹[×]の上手にて三州一番といふ程の名人
 なる上^上何に勝れて清家か思ひをこめて吹ければ三五郎^{宗次}きくに^あこ
 れていと、こ、ろも空に成りおほえす吉田か吹側に唯^一ひたつら^向に寄
 掛り梅花[×]の勾^のひいと清^深く柳に似たる三五郎か花の目元は清家か顔
 打守り自ら感し入たる有様は彼漢の聖卿か^真 王の床にたわむれし其
 古への倂もかくやとおもひしられたり、只清家は夢にのみ夢路を渡
 るこ、地してある身ともなく居たりしか^他多日の本望此時也、今はい
 つをか期すへきとしはし天吹を吹と、めそばに寄たる三五郎か雪の
 様成る手を取て、近比申上兼候得共君を一度見奉^りひてより勇む心は
 春駒のつなきと、めぬ我思ひ明暮一心に奉恋候あはれ何卒某か申旨
 を御心得^{得心}も候は、御恩の程は二世^命迄^もにかけて報すへしされとま
 た人の数にも候はぬ我等如きに候得は御叶^ひはく^だされすとの事^{にて}
 候は、時節到來不縁の我見腹かき切て死せん^{覺悟}事格護極めて候、とい

り取々様々の咄の中に大藏×問ふに向ひて云ひけるは、今三州×中に名高き
 少人×年多しといへどもいつれか當時の随一ならん、といふに久保某と
 いふ老人の友達答へて云ひけるは、當時名に逢ふ若衆には先第一×
 州には内村半平次に松嶋三五郎亦是奈良原清八か隅薩×大の二国に
 は澁谷福崎富山の此三人に勝れたる紅顔は×又も世にあらし、といふに傍
 の柱に寄×掛りて琵琶をひきける老人の友達撥をからひと投捨て、嗚呼
 久保氏はわすれたるかな何そ平田三五郎宗次公を×何そ當時の第一とい
 わざるや彼の内村×半平松嶋富山澁谷奈良原等の君様もまた×兼而貴公の
兼て噂の福崎徳萬尊公もいつれか盛ひと云ひなから分て平田宗次公は
 主なきまゝの深山木のおのかまにく咲乱れたる風情×にて只質×素性にし
 てつくる半こそいとゆかしくも打見得て×是そ當時の随一といふべし
 と言に大藏聞て笑ひをふくみ、浮世か自由になるならばかゝる美麗
 の少人×年と共に契ひを結びつゝ武藝稽古を厲×へつゝ稽古も日々に進まん
 にか成る人か徳有て平田公とは契るらん我等如きの輩は高根の花
 と見たばかり嗚呼天命悲ひかな、と打笑ひければ先の友達ま×いわ
 く、主不聞や彼宗次公は天性廉直剛毅にして武藝はいふにも及はず
×ど文は文之の門に入り昼夜武藝を×を分たすはげみして士道××××××××にかくる處なく亦
 折々は和哥の道さへ嗜みて武士の風雅にこゝろざし殊×仁智のに情も深きよ
×されど又廉々行義を重んじて少も道に欠くる處なし去れば見る人聞人×ことにおもひをかけすとい
 ふ事なけれども未だ一度も彼君と契ひし人は不聞、といふに大藏×
 心にも×有けあれは猶も委細にとふ程に夜もはや五更のころに成ける

にぞ友達の人々も咄も今は是迄×也といきや明日と暇乞しておのかさま
 く帰りける、跡にてひとり清家は先のこと葉×咄に宗次の事の始終
 をよくきゝていと、恋×悲しさいやましつゝ寐らんとすれと目もあわす
 たゞ何となく物狂しかりければ庭に飛出立木×にあたり思ひ立
 だる武士の矢竹こゝろの一念×筋は石にも通る例あり、我も一度は思ひ
 掛切にこがる、一筋を哀とおもへ神佛、恋しき君は平田なる三尊
 公とよもすがら只一心に念しつゝ立木を打てあかせしは×實に堪へ難き清家
 か心の程×こそおもひやるにも哀れ也、斯する事大藏既に十余日に及
 ひければ不思議なるかな清家が一念×心の誠や通しけん彼平田三五郎は
 過し夜より俄に寐狂敷成て夢共×現共なく吉田大藏清家か門に來り
 て×問ふこゝろと見て夢打さむる夜の鐘斯する事一夜のうちに五六度也
 ければいかなる×故と云事を知らず、宗次不思議におもひなからいと、
 こゝろにあこかれて口にはそれといはねとも此事のみぞ明暮に唯ひ
 たすらに思はれて幼心の一筋に詮方なくそ見へにける、されはかの
 また大藏は宗次の事を一心に起ても寐ても思ひつゝ夜は立木を打明
 し昼は手習ふに反古×紙に只宗次尊公一心とばかり書暮×ていたつらに
 思ひをくるしめ居たりしか清家つらくおもふ様、嗚呼如何せん大
 丈夫たる者×武士の忠義の式ツを思ふへきにかゝるはかなき色×香に迷ひ只
 々思ひくるしむ事を去れば我身は斯迄×に切にこがれておもふともと
 ても甲斐なき片思ひしかればたとえ恋×ひ死すとも死しての後×は誰
 有て叶はん恋に清家が身を捨船×のにのりしつみたる跡の哀れをいふ×問

の形行を語りければ五次右衛門尉尉に驚ろき嘆せられしか先大藏に
 一札を述べ、いざ増宗の宅に行かん、と進められしかは大藏聞て返
 答に、某今宵無扱用事の有て急く道にて候得はまたも御目に掛ら
 ん、と式代辭退してけるを三五郎は今更名残いと惜しく泪に暮れて大藏
 が袂にひたとすがりつき、是非に今宵は某か宅に御出候得、と是非
 に／＼と引けれどもた大藏は、今夜は用事の候へは亦も参上
 いたさん、と程よく云ひてあいしらすかりつひたる三五郎か袂を
 ふつと振切て馬にひらいと打乗て鞭を揚てそはせさりける、扱夫
 より五次右衛門尉は三五郎を同道して帰てより深く三五郎をいま
 しめ會て口外なからしめ又も明日も吉田か宅へ五次右衛門尉さし
 こし昨日の一禮厚く述へて偏に他言なき様にと頼みける、抑五次右
 衛門尉かく述いましめたりける子細は其時代はかりにも士節を失
 ふ者は其親類一族共より忽ち切腹をなさしむる風義也ければ今度倉
 田小濱か狼藉して逃去りし事はすこぶる節議を失ふ者なれば若
 世間いひはやして両家の一族聞付てはゆ、敷大事の基ひなれば
 五次右衛門尉是を遠慮して斯は他言を戒めける仁智の程こそ情なれ
 其後程を経て此事世上に云ひはやし終に倉田小濱は彼親族共より
 切腹させけるとかや誠に其時代の士風の烈しき事是にて知る
 べし

吉田平田の両雄兄弟の義を結ぶ事

千時薩隅日三州之御太守公は高祖忠久公より十五代前陸奥守修理太

夫貴久公漢の光武人主の義にのつとり玉ひ三州中興の聖太守にて寛仁大度の
 名君也、旗旗の指ス所反賊悉く甲をぬき國家始て寧一にぞくし淳風
 上古に髣髴たりしか夫より三位法印龍伯公相續ひて兵庫頭義弘公に
 いたり共に仁義の名大将にて一度怒ては九州命にしたがひ威名扶桑
 に傑出せり、去れば上之仁を好んで下義を好まざるはなしかや、
 御家の士臣に至る迄何れも英雄豪傑にして若手の武士の輩も律義を
 重んじ勇を事とする中にも吉田大藏清家はいふは行年爰に式拾三
 其比無双の弓取にてあまねく三州中に名を知られ太刀強打のの手利
 なるが常に律義を嗜みて忠義の二つを重しければ忝も太守公にも別
 而御秘藏に思召、武士の手本は大藏也と折々御賞美有し程の者なり
 ければ若手の武士の中にも容貌言行に至るまで吉田風とてはやり
 ける、去れば若手の面々は清家か友となるを以て皆氣望として
 凡鹿兒島中の二才共は過半大藏か幕下也故に先日倉田小濱が狼藉
 の折も吉田大藏と名をき、て彼等如きの荒者も終に逃去し事は兼而
 清家か威風に恐れ居たりし故也、扱吉田大藏は常に忠孝を重んし
 て兵術修練に身命を抛ち、いつも清家か宅に同志を集め旦夕武藝を
 励まし兼而友のふ同志の中にも美麗の少人多しといへどもさして
 詠めは薄墨の心にそまる色香なく居たりしに花の平田の三五郎を一
 度見たる其時よりいと、こゝろにとまり船なみのよるあこかれ
 て恋ふる心の一筋に今は命も絶へなんとおもひこかる、有様は哀也
 ける事共也、然るに或夜清家か友達の面々五六人列れにて夜咄に來

るが如く跡をも見すして逃去ければ小者式才も是をも振りて逃去たり、跡に残れる三五郎は無是非処に出逢ふたりと最早格護を究めつ、譬ひ年こそ幼きとも武士の家に生れし身の非興を取る場は中くにはつすまじきそ弓矢の道、まして況や今年是我見も既に拾三歳若しも無禮をするならば恥辱を身の上に受ては只に此場を引へき者か露の命の消ん所は誠に天命とおもひ極る身ながらも尾上等か事は残多く主の危難をよ所にする腰抜哉と今更にいと口惜しく限りなくおもひをくたく宗次の心の中そ切なけれ、時に軍平云ひけるは、用事と云ハ余の義に非らず先度尾上権六を以て差上置候手紙の御返答あまり長引候得は此儀を御たつね申上度御返答いかに、と云ひければ三五郎き、て、家來尾上より貴様の御手紙等拝見□しはかつて夢にも無御座候、といふに軍平遠近を見廻しけるに爰は人通まれなる所なる上入相近き頃なれば絶て人影はなし、其時莞爾と打笑ひ、左様の事にて候は、御返答なきも御尤申上たる子細とては某君を日外やより偏に奉戀こがれておもひは常に星の数いくよかひとり鳴明かすこ、ろの中の切なきを申上たる事にて候去れば我身は御存之如く不風雅至極の生れ付にて無藝無能の身なれども君を思ふの一筋は八幡不易候得は何卒一度は御情をも候は、露の命は君様に差上べきは一定せり、と様々口説て云ひければ宗次は、存外なる仰哉左様之事は某は未だ存んせず、と云ふに倉田小濱が諸ともに、是はつれなき御返答何卒一度は平に御叶ひくだされたく、と是非とい

く云ひければ只三五郎は前のことく返答し、幾度仰せ候とも左様の事はぞんぜず、と云ひ捨、帰る後より倉田小濱は切聲にて、武士の斯迄詞を盡し云ひたる事を聞分ぬ木竹同前の者に口にて言は小作也只無異氣にか、れ、と倉田軍平後より三五郎を大たきにたきければ宗次心得たりと脇さし抜かんとする所を小濱助五郎ひたと両手を取て少しも不動、三五郎は無念至極におもひつ、心の中はもゆる火の火水になれともみ合ふに此いきおひに三五郎か髪の本結びふつときれ梅ののをひの乱れ髪乱れてかほる春風にふかれて衣裳のつまかへる雪を欺くその肌倉田小濱は彌々こらへす花にもまさる宗次を剛力荒者兩人か物の数とも思はずして既に捻ち倒して無理に本意を達せんとゆふひも西に入相の無常を告る山寺の鐘の響きそ音を添えて哀いやます春の暮、往來の人もあらわへに哀や今の三五郎か未だ少年の悲しさはとて叶わぬ物故にいと、詮方なくもみ、扱も無念、とおもふなる心の内そ無慙なり、斯る所に宗次の運やつよかりけん一人の士馬に打乗通りしか此形勢を見るよりもいそき馬より飛て下り某は吉田大藏也各何事にて候や、といふ聲より倉田小濱の兩人はいか、おもひけん一言もいわすして忽ち逃去失にけり、時に大藏三五郎に事の次第を尋るに宗次涙をはらくと流し、某は平田太郎左衛門か子息三五郎宗次といふ者也、と事の始終をつ、ます語られしにまた折能くも増宗の一族平田五次右衛門尉此所に通り合ともに驚き立寄て、何事そや、と尋らる、に大藏右

君を思ふ枕のしたはなみた川身は浮草の寐入るまもなし

三五郎いかゞおもひけん見おはると彼手紙をすたゝに裂きかみたくりてぞ捨たりける、跡にて権六此事を聞て大に恐れいそき軍平方え差越し叶はん由をいひければ短氣の軍平、大きに怒り大の眼を闊と見開き、やおれ権六慥にきけ先日は既に汝詞を放て、叶はんと云はずやそれに今更叶はむとて我か骨折をあだにする事返スゝも奇怪千乃よしゝ我を欺は欺け汝か頭微塵に切割り目に物見せんと大たんひらをひねくれは権六面色土の如く忽ち振ひ出し、我全く欺き奉るには候はねと主人三五郎殿といふは少年ながらも餘人に替り心の猛き事火の如く折あしくして云はんには手討に逢はんもはしりかたく夫故ケ様ゝにはからひ置てかの手紙を見られしかども返事の事は扱置き引裂きて捨られし始終の事に押計ひ叶はんとては申せし也されと貴公様の御立腹も亦御尤に候得ば近日中に能き折を待て直に逢せ奉らん其時おもひの程をあらし玉へと色々取締ひ言ひければ軍平も漸く怒ひをほそめ、左あらは必約束を違ふへからすまた此上の間違の事あらは汝か首は天に飛、とさもあら、かに云ひ付ければ只権六は恐れ入たるばかりにて一言もなくして帰りしか其後軍平方より度々催促しけれとも権六は更にすへき方便なく免角して日数を過しけるに既に其年も暮にけり

倉田小濱狼藉救吉田大藏平田三五郎之危難事

明れは慶長二年の新玉には平田三五郎宗次は既に拾三歳の春を迎へ

今年正月七日に角入御免を蒙りければ華の面影日頃にまさり色香もいと、梓弓春立来てそ四方山に霞の衣うすきて緑りをた、む初春の日影長閑に有りければ三五郎兼而小鳥を飼て樂しみけるが増宗の別業吉野に有りけるに同十日に小鳥狩にと思ひ立少者若黨の権六を召つれて吉野、やしきへさしこえける此事を彼倉田軍平聞付て天のあたへと悦で同者の小濱助五郎を誘ひつ、時分を作て

吉野をさしてそ走行ける、斯て平田三五郎は終日小鳥を取て遊ひ暮しけるが最古夕陽沈みのころ主従三人召つれて戻る道にも鳥咄余念もなくして帰りけるに向より倉田軍平小濱助五郎兩人つれにて出來りければ三五郎打見て兼而かれとは存知之上また先日の手紙の事杯に彼是心におもはれて、よしなき道にて行逢ふたりいかゞせん、と宗次はひとりこゝろに思はれけるか早其内に倉田小濱も近くなり軍平、屹と見るよりも急に宗次の前に立ふさがりて、扱もいかなる恵みにてか能き所にて逢ひ奉れり某君に無抛申上度用事の候、こなたへしばし御出くだされたく、と云ひければ三五郎はひと胸には答へてもさあらん軀にもてなして、存懸なき某に何の用事の候や爰にて仰候へ、と云ふに付て尾上権六、式代して主人三五郎殿も未だ若輩にて候得ば、といわせもはてす軍平眼をいからし、汝慮外の助言今一言を出さは真二ツに成すべし、と三尺有余の大太刀をそひに打て以の外なる氣色なれば臆病未練の倍臣者命の惜しさに主をもわすれ、御免くだされ、といふよりはやくた鼠の逃

かえず宗次も今年三五の秋の露消へなん華の名残にて同じ戦士の筈の下に百歳の身をち、めひとり越なん冥土の旅伴ひ行しぞ哀也

去れは高きも賤しきも弓矢の家に生れては義の為に命を捨るは武士の本意とては云ひながら是はまたためしき愛着の縁にひかれて義の一筋を守る心の程そやさしけれ、いてや由来を尋るにかの平田三

五郎、公といふは、鳴津家累代執權職たりし平田太郎左衛門尉増

宗の息男とかや、鎧着の初、比よりも氣量骨柄人に越へ末頼母敷見へたりしか日にまし月に随て華の倂吉野山みねの櫻か秋の月雲間を

出る風情よりも猶あてやかに麗はしく容色無双の少年たり、されは

其比國家乱世の折なれとも流石に絶へん人心いつかそれと見初て

は三五郎公に命を捨我逸増に戀の山しけき小笹の露わけてぬる、袂

のかはくひまなき、おもひをは常にするかなる富士の煙とこかれ

ても時の家老の子息といひ父の慈愛もあさからず、何かは事を憚り

の関に人目をはかりて取入る事も難波がたあしのかり寐の一夜た

に契りし人はなかりける、去程に慶長元年には宗次も未若木の八重

櫻さくや二六の蓮の花色香そ深くみかの原わきて流る、いづみ川い

つみきとてか戀しかる若年の武士の其内に倉田軍平とて血氣盛の荒

者ありてかの宗次にあやなくまよひ一心不乱におもひ慕ふといへと

も手便なきさの捨小船よるへも浪の梶枕かはく隙なき袖の雨晴る、

月夜もくもるよも雨露に打れて一向に君か門辺に徘徊して自由にな

らん世の中は我身の上と述懐して幾夜かおもひ明せ共いかなる不縁

か軍平は斯迄おもふ甲斐もなくうたてや唯々徒らにすくる月日は多くして高間の山のよそなから見る事さへも中々に君に縁日あらさ

れはいかゞはせんとおのれのみ水にもへ入ル螢火のこがれて千々に

おもひしに爰に屈竟の事こそありけれ、尾上權六とて幼少の時分は

倉田家に奉公して小者也し者此頃平田家に家来と成りて若黨役を勤

めける、軍平屹と心付彼、權六を呼寄せ、宗次公に一心なる由を語り

様々引出物杯あたへ、ければ欲には迷ふ人心いとやすく受合けるに

そ軍平うれしさがぎりなかりけれども元来倉田は唯血氣ばかりの男

にて文字の道はつゆ知らず、無學至極の者なれば何といひやる事も

出来ず、色々工夫して扱權六にいひけるは、唯今は我考ゆる子細

のあれは明朝此方より手紙を認め遣ん、といひ置て其夜倉田友人

小濱助五郎といふに相頼みておもひの程を書く、め明る早朝權六

方へそ遣しける、扱も尾上權六は平田家新参の者なれとも生質至

て善用之者也しかば新参なれとも大きに用ひられ常には三五郎の髪

をゆひ唯何事も權六ならてはと一向に用られける、されども倉田か

頼の事は自余の儀とは事替れば能キ折もがなと様々こゝろを盡す

と云へども亦折もなくてもたしけるに或る朝例の如く髪結ひの折

から側に有ける宗次の硯箱の中へ彼手紙を安置けるに三五郎手習

らひせんとて硯箱をあけられしに平田三五郎様倉田軍平と書たる

一通の手紙有ければ則押開き見るに色々おもひのせつなる程を書

てその奥に

は、胸板を撃たれ、終に財部の、朝たの露とぞ消にける。生年
れ、鉄壁にあらざれば、今を盛りの武拾八、惜まぬ者は無かりける。斯る所に、清家が郎
等、佐藤兵衛尉武任は、主人の死骸を肩に掛け、味方の陣に退き
しに、頓て宗次追付

告げれば、宗次聞いて

扱は清家殿、最早打死召れつるや、死なば一所と思ひ

しに、合戦に隙なくして、後れしこそ無念なれと、其儘駒より飛
下り、清家が死骸に抱き付き、打しほれたる。卯の花の、鎧の袖に
乱れ髪、世に有る内の言ひ替し桃李は物は言はね共、今は最期の色
見えて、跡に残りし紅葉々の、散るも惜しまぬ大刀の柄、是迄なり
と思ひ切り、武任さらばと云捨て、駒引きよせ、打乗り、

るやう某

島津方に於て、平田三五郎宗次なりと、

大身の鎧を、

馬の平首に引そばめ、手並の程を見せむとて、面も振らず切て掛る。
当るを幸ひ、切伏せ突伏せ、必死に成て戦へば、敵数

多討取り、我身にも、数ヶ所の疵を蒙り、哀れ、三五の秋の空、替

り行く世の習ひにて、義の為に、骸を戦土に晒し、百年

の身を縮め、一陣の風に誘はれて、終に、財部の、草葉の露と消に

ける。今を盛りの花衣、きて見る人々、鎧の袖を濡しける。

「形見の桜」は、庄内の合戦を三段の語り物に仕立てたもので、「庄内崩
れ」の名でも呼ばれている。作者は江戸時代末期の人、中村四郎太、歌
人八田知紀が一部を添削したという。第一段、第二段は美少年平田三五
郎の戦死に向かって吉田大蔵との「少人道」が、第三段では美少年富山

次十郎の戦死が語られている。猶、第二段では春田主左衛門が登場し、
内村半平との柳川原対面が語られる。庄内の合戦が始まった経緯を述べ
る冒頭部が終わって、平田三五郎の物語に転じた部分、「いと、哀れを
止めしは：（中略）：場までも、同じ道にと心ざす」は二巻本『庄内軍記』
の表現が利用されている。又、敷根の門倉薬師堂に「書きおくも」の和歌
を書き付ける条と平田三五郎を単なる美少年と見た五、六騎の伊集院氏の
武者を相手に奮戦する条は『三國名勝圖會』の記事をもとに脚色したの
ではないかという気がする。しかし、母親と三五郎との別れや吉田大蔵
の討ち死にの場面は本稿でとりあげる他の平田三五郎物語にはない。

六

次に、冒頭部で記した『賤之麻玉記』を紹介する。長文なので、序、跋、
目録等は省略したい。

倉田軍兵尾上権六を頼む事

疇昔は今日の昔し、庄内二年の在陣には未二葉の若衆より國に杖つ

く老の身も名を一戦の功に惜て各子路か纓を結び親に先立子におく
れ袂をしほるひともあり、主を失ひ兄弟を討せ胸をこかせる族も有

離別の愁ひ取ひく也しにわきて哀に聞得しは平田三五郎宗次と

いへる少人吉田大蔵清家に男色の好み不浅、共に故郷を出しより片

時も側を相去らず、征鞍山路を分る日も同じく迷ふ馬締の塵、軍旅

野外に屯ろせは同じし褥のかり枕、共に詠むる夜半の月、影の如く、

伴ひしか清家先に討死しければ、死なは共に、と契ひにし言葉をた

御存も御存の通りの通り某も、内村半平と、拾四歳××××××××の春の頃より、兄弟の契り浅致からず、春は花、秋は月見に、詩歌を吟し、武士の勇める道を、相あひ励み楽みみけるに、計らずも、此一乱到来し、矢猛心の梓弓、互あひに敵味方と引別れ、今は半平が身の上、いと床余りしく思ひし故、志和地の城主・伊集院掃部助殿に訟へ、御内の内村半平と、拾四歳の春の頃より兄弟の契約約束致せしにより、一日の対面を免し給へば、生涯の本望なりと、おもひの程を、深く書込めし、矢文を以て乞ひけるに、掃部助殿いと愛着あつの實情を感じ、情有ありて、此程、柳川原に於て、頼みある、中の酒宴致せしに、何語るべき暇もなく、別れの盃。さすが又、いつか其日も暮はどり、あやくにも、泣て別れの哀れなり。泪川、其源を尋れば、誰が誠より出ぬらんかは。又、古歌にも、逢ときは語り尽すと思へども別れになれば残る言の葉

今身の上にしら雪の、消くるおもひは、此道春が胸むねの闇、海人のたく火にあらねども、夜はこがれて螢火の、燃もて飛立つ方もなしと、清家××、鎧の袖をひかへ、道春が、さめざめと泣きければ、清家××、共に泪なみだを流し、互あひに此場を別れける。斯る所に、敵のときの声、矢さけびの音、夥おほ敷聞えければ、清家、宗次諸共に、馬うまを馳出し、寄く敵に打向ふ。清家が、乗りたる馬は逸物なれば、思はずも、宗次、二町計が程はりおくれけるに、兎こある木蔭により、はやりをも若者共、五六人、宗次を見掛け、天晴れ、類ひなき美少年かな、いで、生捕なまにし、夜の衾ふとんを一つにして、慰み物にせんと、大手をひろげて取りって掛る。

宗次聞きくよりも、何、それがしを生捕にし慰みものにせむとや、汝等如き者共に、此宗次がめをめと、捕らる、物かはと、緑の黒髪逆さまに、立ち向ふ敵を、瞬まくうちに二三人、突伏せ切伏せ、車輪の如くに切り廻まる。恰かも、鬼神を取くひしぐ勢ひなれば、今は敵兵、叶はふまじとや思ひけむ、逸足出してにげて行く。宗次見みるより、最前の、広言にも似ぬ憶病者共、返せ戻せと声を掛け、追かけ、れど、臆病神に誘はれ、跡をも見ずして逃て行く、心の程こそ浅ましけれ。宗次は、朱あざに成たる大身の鎗を、流る、水に打そ、ぎ、暫時息をぞ続つにける。されば、清家は、兼あて覚えし、黒革威の鎧よろい着て、握り、大中黒の征矢せいを負ひ、黒華威の鎧よろい着て、五枚甲の緒をしめ、五枚甲の緒をしめ、重藤の弓の真中握り、大中黒の、三十六指たる、征矢せいを負ひ、月毛の駒の、太く逞しきに乘たりしが、大勢の中に取籠められ、斯はては叶はふまじと、小高き所にかけ上り、大音揚て名乗るやう、爰こゝにひかへし、は、島津方に於て、吉田大蔵清家とて、名なを得たる、強弓の精兵、矢つぎ早の手利ていなり。日頃音にも聞きつらん、今日はよく見よ汝等共、矢先に、敵は嫌ふまじと、五人張りに十五束、さし取り引詰ひめ射る程に、群がる敵をあだ矢なく、三十六騎は射て落す。己に矢程も尽きぬれば、持たる弓をかりと投捨な、敵中に切て入る。清家は、元より、丸目藏人頼恵が門人にて、持捨流の達人なれば、右みぎ、切左きりひだり、切に切廻る。当るを幸ひ、切伏せきりひだり、切伏せ、恰も、虎の荒る、に異ならず。されば敵兵、是こゝにあぐみ果、手詰の勝負は無用なりと、鉄砲てつぱうの者、拾四五挺を相勝り、並なべかけてぞ打けるに、清家は、胸板むねいを打貫かれ、哀

田昌巖、押川強兵衛、村尾源左衛門笑清等を先として、物に馴れたる、屈強の兵共馳集り、残る所なく手配し、軍旅の指揮を成し給ふ。爰に、北郷作左衛門尉三久は、北郷長千代丸を引立、数千騎を従へ、都合其勢拾万余騎、兜の星を、炎天に輝かし、旗指物を、嵐にひるがへし、同六月上旬、吉日を撰ばれ、君の御馬を出させ給ふ事、誠に、勇々敷ぞ見えにける。

是は扱置き、爰に又、いと哀れを止めしは、平田三五郎宗次にて、平田太郎左衛門 増宗の息男とかや。今年三五の秋の月、雲間を出る風情より、尚ほ妖艶に麗しく、容色無雙の少年なり。吉田大蔵清家と男色の契り浅からず、共に故郷を出しより、片時も側を立去らず、征鞍山路を分る日も、同じく迷ふ馬蹄の塵、軍旅野外に屯せば、同じしとねの仮枕、共に詠むる夜半の月、いはんや合戦の場までも、同じ道にと心ざす。されば宗次は、いつに勝れて花やかに、先肌よりは、伽羅の匂ひの肌寄に、春の野の、柳桜を縫ひ出したる、薄紅梅の直垂に、卯の花威しの鎧着て、わざと甲は召さざりしが、金の髪を振り分け、黄金作りの太刀をはき、鹿毛なる駒に梨地の袴をおき、作の太刀を帶き、鹿毛なる駒に、梨地の鞍を置き、緑の黒髪振分け、平安城長吉が打たる、大身の鎗を携へ、今ぞ出陣に成ぬれば、宗次は母上の前に蹲踞き、今生の暇乞を述べれば、母上は、只泪にくれて、暫時言葉もなかりしが、嗚呼、親子の別れ程、何に譬へむ方もなし、あはれ、貴きも賤しきも、子を思ふ道に迷ふとは、今こそおもひ知られけれ。親の心は斯までも、勇み立たる宗次は、已に馬に

打乗り、急ぎしに、跡より母上呼返し、必々、合戦の期にのぞみ、未練な事はし給ふな。骸は戦士に朽るとも、名を末代に残されよと、声も枯野のきりくす、泣わめきて申さるゝに、宗次は、かねて覚悟の事なれば、何のいらへもなく、唯忙然として居たりしが、振り分る、黒髪の、鎧の袖に、泪と共にはらくと、乱れ掛りし形勢は、さながら、楊柳の雨に洗はれ、春風に打靡く風情なり、斯て、清家に迫付き、共に打つれ進みけるに、爰は早、敷根の里に、成ぬれば、音に聞えし、門倉薬師に参詣せむと、馬より飛下り、うやくしくも、南無薬師尊と合掌し、此辻堂に逍遙して、一首の歌をぞつらねける

書きおくも形見となれや筆のあと我れはいづくの土となるらむと矢立を出し、清家、宗次を抱き揚て、筆先高き天井の、板の表に記し置き、又は、此度、庄内一乱に依て、清家、宗次打つれ、合戦に趣くと、堂の柱に書付しは、末の世までも止まりて、見る人袖をしぼりける。共に踏み出す武者草鞋、結び合せて行先の、誉れは後にしられたり。

第二段 吉田平田の両士春田主左衛門に遭ふ事

吉田平田の両士憤激戦死之事

左程に、清家、宗次を打つれ、はるくと急ぎしに、最早、都の城にも成ぬれば、柳川原の辺りにて、春田主左衛門道春に行逢ひしが、個はいかに、清家、宗次殿にてましますか。嗚呼、羨しき形勢かな。

次に『庄内陣記』を見てみよう。『庄内陣記』は「財部合戦ハ普通ノ庄内軍記等ニ載ストイヘトモ唯平田吉田ノ事實ヲ記スル者也 然ルニ予諸家ノ覚書等ヲ纂テ之ヲ校シテ之ヲ録ス」という立場で「財部合戦之事」を纏めているので、平田三五郎、吉田大蔵については次の記事があるだけである。

斯テ城方一手ノ将重信越後荷籠ノ渡リニ押來リ弓鉄炮ヲ揃ヘテ一時ニ打立無ニ無三ニ切立攻戦フ 巳ノ尅ヨリ申ノ尅迄火出ル計攻戦ヘハ寄手ニモ吉田大蔵清家平田仁左衛門尉宮内治部等打死ス

拙稿「玉里文庫本『庄内陣記』の性格等」『研究年報』第十四号（昭和六一年三月発行）で既に指摘したように、「巳ノ尅ヨリ」以下の一文は二巻本『庄内軍記』のものによっている。最初の一文は『庄内軍記』にないが「荷籠ノ渡リ」が前引の都城市立図書館蔵本の「拾遺」に見えるので、「拾遺」やその他の資料（「諸家ノ覚書等」）によって書かれた増補部と見られる。

それにしても、『庄内軍記』を読んだ時から気になっているのだが、平田仁左衛門と平田三五郎は同一人なのであろうか。

猶、『庄内軍記』『庄内陣記』と地誌との関係は拙稿「江戸時代末期の地誌に見る庄内の乱」『研究年報』第十六号（昭和六三年三月発行）を参照されたい。

次に薩摩琵琶「形見の桜」から平田三五郎、吉田大蔵に関係するところを引いてみる。^(注三)

第一段 伊集院忠真謀反之事 吉田大蔵平田三五郎出陣之事

久方の、雲井に高く、照る月も、満れは欠る、習ひ有り。ましてや、人間の世の盛衰は、まのあたり、此理りの、例しには、案に顕はる、。されば、^{庄内の城主} 伊集院源次郎忠真は、島津の重臣として、庄内

八万石を領し、栄耀驕侈はほこり、^{る身なりしが} 父幸侃が、欲心のあまりにや、^{君の} 反逆を企て、御手を企て、穢させ玉ふ、^に より、倅源次郎忠真も、父の逆意を継ぎ、^{四年戊亥 聞} 頃は慶長己亥、三月下旬、庄内、都の城に楯籠る。

山田・安永・志和池の城・財部・高城・野々三谷・梶山・勝山・山之口・梅北・恒吉・末吉まで、都合十二の、砦を構へ、龍の雲を起

し、虎の風を呼ぶ、勢ひにして、白石永仙を初め、^{伊集院掃部助、倉} 集院新右衛門尉、比志島式部少輔、^{猿渡肥前守、伊集院掃部助、倉} 倉野七兵衛尉、伊集院掃部助、^{野七兵衛} 猿渡肥前守、伊集院兵部少輔忠能、忠真が弟、伊集院小伝次等、都

合其勢二万余騎、砦々に馳集り、籠城の用意をなして、島津の屋形に、弓を引くとの、聞えあれば、^{大守} 大守、^召 聞し召れ、以の外に、御腹を立られ、其儀ならば、早く討手を差向け、源次郎忠真が、首を刎

ね、実検に備へよとの御誼なれば、先壱番に、島津中務少輔忠豊、^{比志島紀伊} 同図書頭忠長、新納武蔵守忠元、樺山権左衛門尉久高、喜入撰津守^{島津} 守国貞、喜入撰津守忠政、伊勢兵部少輔貞昌、忠正、伊勢兵部少輔貞昌、比志島紀伊守国貞、阿多長寿院盛敦、山

世ノ約束トハ申ナカラタメシ少ナキ次第也 云々

按ニ此文實伊勢殿記否 蓋又自往日以虚傳虚而名伊勢殿作歟 強不
因其作者幸ニ採事實者也 ○ 平田氏戦死ノ所財部ノ内見籠ノ渡ナ

リ 其塚在于今 吉田氏ノ墓又有之 此文已ニ康時ト記セリ 又近

コ此ヲ聞ニ隅州国分安樂氏ノ家ニ吉田大藏直ノ状有之 清家ト署ス
ト云々 按スルニ吉田氏ノ系譜ヲ皆以テ清ノ字爲實名 則此説有據者歟

○ 惣財部渡瀬等ノ事不出諸々旧記ニモ 又前編書ニモ所不記之也

予近聞財部國分等ノ古老ノ傳説彼是参考シテ以補本文闕タル故ニ於其事
毫釐モ有虚妄之説者後人可不厭正之矣

この記事は「拾遺」ではなく、二巻本『庄内軍記』の編著者の解説文
である。それによれば、「伊勢殿若衆文」の吉田大藏の名前を彼の書状
の名前によつて康時から清家と改めるなどして「平田三五郎戦死之事」

は出来ているとのことである。引かれている「伊勢殿若衆文」を見ると、
平田三五郎の様子も武装と黒髪の描写だけに止まっている。又、「男色」

の語もなく「知音不淺」となっている。その外、「前世ノ約束」という
仏教的表現もあり、「伊勢殿若衆文」はほぼ同内容と認められながら、
細かな匂いで異なっている。「平田三五郎戦死之事」は「伊勢殿若衆文」
の改訂版で当代「少人道」の理想像に迫つたものであろうか。

「伊勢殿」が『庄内軍記』に登場する伊勢兵部少輔貞昌とすると、平田
三五郎物語の成立も興味深い。しかし、吉田大藏が先に討死している点
で前引の義久書状の内容と異なっている。「伊勢殿」の著としても、史

実をはなれた戯作だったのに違いない（勿論、仮託の可能性が強い）。

吉田大藏先死の説が財部在地の伝承に結び付いていたらしいことは、次
の都城市立図書館蔵本の「拾遺」の記事から窺われる。

戦死功名ノ内ニ平田三五郎ト記セルアリ 彼人ハ無双ノ美童ナリケ

レハ戦死ノ事ヲ哀傷シテ新納武州入道拙齊ノキノフマテ誰カ手枕

ニ乱レケン蓬カ本ニカ、ル黒髪 ト読マレシハ世ノ語傳テ催感処也

然トモ其戦死ノ処不分明処ニ予此比傳聞ハ彼平田三五郎ハ財部ノ

内古井ノ荷籠ノ渡戦死ト云リ ケニモ其塚在テ 今彼人□人トカヤ

吉田ノ其遥ニ掛隔タリシカトモ彼人戦死ノ事ヲ聞引帰シテ打死セリ

トテ其塚亦有之 此時ノ軍最モ猛シト云リ 雖然財部ノ軍ノ事ハ諸

ノ旧記ニモ不見 定テ財部ノ古老ノ傳タルヘシ 然レハ平田氏ノ戦

死ハ安永ニ非ルコト歴然タリ（都城市立図書館蔵本）

この「拾遺」の文章と『庄内軍記』本文との関係ははっきりしない。

「予此比傳聞ハ」というのは『庄内軍記』「平田三五郎戦死之事」を知
つての上でなのであろうか。平田三五郎、吉田大藏の塚とその伝承の記
され方から見ると、どうもそうも考えがたい。安永での戦死者の中に平
田三五郎の名がはいっていると、拙齊の「キノフマテ」の歌が平田三
五郎を悼んでのものだとか、他の資料に出てこない記録、記憶で危い気
がするし、「拾遺」の記事は「平田三五郎戦死之事」も「伊勢殿若衆文」
も知らない人の新発見のように読める。

甲ヲハ召サリシカハ嬋娟タル顔ニ髮髻タル鬢ノ毛ノ鎧ノ袖マテハラ
 〳ト乱レカ、リシ有様ハサナカラ楊柳ノ春風ニ靡ク風情ナリ 清
 家ヲ尋ネ兼タル有様ニテ忙然トシテ立玉フ 武任是ヲ見テ 宗次公
 ニテ候カ ト問ヘハ 清家ハイカニ ト宣フ 早ヤ討死 ト答ヘケ
 レハ コハイカニ浅猿シ ト馬ヨリ下ニ飛テ下リ其儘死骸ニ抱付發
 露啼泣シ玉フカ 好シ〳今ハカナシ合戦ニ隙ナフシテ後レシコソ
 無念ナレ今ハ此迄ソ武任去ラハ ト云捨テ又馬ニ打乘リ敵 二驅入
 テ忽チ古井 原上ノ草葉ノ末ノ露霜ト消玉フコソ痛シケレ 然レハ
 弓矢取ル身ノ習ヒ高キモ賤シキモ義ノ爲ニ命ヲ捨ルハ武士ノ本意ト
 云ヒナカラ是ハ亦例シナキ愛着ノ縁ニ引レテ同シ戦士ノ苦ノ下ニ百
 戦ノ身ヲ縮メ独リ越ナン冥途ノ旅伴ヒ行コソ哀ナリ 倩是ヲ觀スル
 ニ春ノ朝ノ花ノ色一陣ノ風ニサソワレテ秋ノ夕ヘノ紅葉ノ一夜ノ霜
 ニウツロイテ化ニ散リ行ク風情ヨリ猶ハカナクソ見エニケル 伴ノ
 二人首途シテ財部ヘ趣ク時或ル辻堂ニ逍遙シテ 平田三五郎宗次吉
 田大藏清家共ニ庄内一戦ノ旅ニ趣ク ト堂ノ柱ニ書付ケルコソ末ノ
 世迄モ留リテ其身ハ苔ノ下ニ朽野外ノ土トナリヌレト佳名ハ身後ニ
 残リツ、見ル人袂ヲ絞リ得ス 實ニヤ龍門原上ノ土ニ埋 骨不埋名
 トハ浩ルコトヲヤ申スラン

平田三五郎、吉田大藏は内村半平、春田主左衛門が敵味方に分かれた
 のとは異なり、同じ大守方として従軍した。『庄内軍記』の右の「平田
 三五郎戦死之事」は二人の従軍から戦死に的を絞って、見事な内容にな

っている。平田三五郎、吉田大藏の話が有名なのは、平田三五郎が「容
 色無双ノ少人」と記されていることと、二人が「愛着ノ縁ニ引レテ」共
 に戦死を遂げたことにある。『平家物語』では乳兄弟の結び付きの強
 さが謳歌されていたが、「平田三五郎戦死之事」は男色を謳歌すること
 になったようである。

『庄内軍記』の成立については「庄内軍記」の「自慶長到今幾一百
 年」が目途である。しかし、その間、どのようにして「平田三五郎戦死
 之事」のような内容が纏められたのであろうか。このことについて、鹿
 児島県立図書館蔵本の「拾遺」に次のような興味深い記事がある。
 (注二)

世俗伊勢殿若衆文ト名ツケテ小児ノ弄ヒ草ニ写シ傳フル一紙有リ
 按スルニ是嬌言嬉語ノ樂書ト見エタリ 其詞フツ、カニシテ取用ル
 ニ足ストイヘトモ平田吉田戦死ノ事ハ併ラ其實ヲ記スル者歟 故ニ
 其詞ノ拙キヲ不厭其事ノ實ナルヲ以テ摘テ之記于茲 備ル参考而已
 昨日ハ今日ノムカシ平田三五郎ト申ス少人吉田大藏康時ニ知音不
 浅 一年隅州庄内ニテ康時討死ツカマツル 一騎當千ノ倅者佐藤
 兵衛武任彼死骸ヲ肩ニ引掛味方ノ陣ヘ引退 後ヲ見レハ若武者一
 騎卯ノ花オドシノ鎧ヲ着甲ヲハ召サリシカハムカフセキ毛ノ□ニ
 鎧ノ袖ニカ、リシハサナカラ楊柳ノ風ニナヒクカ如シ 武任ツク
 〳ト見テ 宗次公カ ト申セハ 何某 トノタマフ 康時ハ打
 死 ト申 コハイカニ 云ヨリ早ヤ馬ヨリ下ニ飛テ下リ彼死骸ニ
 抱付歎給フカ 合戦ニ隙ノフシテオクレシ事前

右之外人衆無何事候間、珍重ニ存候事

925 龍伯様より惟新公^三御狀之内

財部口合戦甚手きひしく儀^三而、平田三五郎朝ハ分捕、夕方戦死をと
け候、吉田大藏蒙深手落度申候、其外何事もなく候、珍重存候、

右日付は慶長四年十月六日と有之由、全文無之、略写之□也、

右の二つの記事は925がやや具体的だが、同日の手紙と思われる。これらによれば、慶長四年十月六日、財部口で激戦があり、平田三五郎は朝、「分捕」などの手柄をたてたが、夕方戦死したとのことである。吉田大藏については「蒙深手落度申候」とあり、重傷を負って陣営に運び込まれたものと見える。大守方の死傷者を列挙して報じただけで、勿論、二人の関係などは全く記されていない。

二

同じ『鹿児島県史料、旧記雑録後編三』の825「殉國名藪抄」には次の記事が見える。

二十八日、吉田大藏清盛^{財部の渡瀬を成て敵と戦ひ死之}、平田三五郎宗次、平田二左衛門、

宮内式部左衛門^{とも}同小者一人、

「殉國名藪抄」成立の経過については知らない。しかし、この記事は先に引いた島津義久書状の内容とかなり異なる。義久書状は十月六日の日付になっているが、「殉國名藪抄」では十一月二十八日と五十日余の隔りがある。場所などについても「殉國名藪抄」の吉田大藏の割注「財

部の渡瀬を成て敵と戦ひ」は義久書状の「財部口へ人衆少々從爰元指出候」とかなり印象を異にする。又、二人の扱いも、義久書状は平田三五郎は夕方戦死、吉田大藏は「蒙深手」と書き分けていたのに、「殉國名藪抄」は吉田大藏に「敵と戦ひ死之」とだけ注して甚だ平板な記述となっている。「殉國名藪抄」は庄内の乱鎮圧後の編纂書であり、義久書状とは異なる資料によつたものと見える。

三

庄内の乱関係軍記に平田三五郎、吉田大藏が登場するのは二卷本『庄内軍記』からである。次に該当部を引用する。^(註二)

巳ノ刻ヨリ申ノ刻迄火出ル計リ戦ヒケレハ寄手ニ吉田大藏清家平田
仁左衛門尉宮内治部等討死ス 其外兩陣諸共ニ打死手負數^を知ラス
親ヲ先立子^にハ後レテ袂^にヲ絞ル人モアリ 主ヲ討セ兄弟ニ別レテ胸ヲ
焦セル族モアリ 別離ノ愁トリノ也シニ分テ哀ニ聞エシハ平田三
五郎宗次ナリ 是ハ平田太郎左衛門増宗ノ息男トカヤ 今年三五ノ
秋ノ月雲間ヲ出ル風情ヨリ猶アテヤカニ麗シク容色無双ノ少人^なタリ
吉田大藏清家ニ男色ノ好ミ浅カラス 共ニ故郷ヲ出シヨリ片時モ
側ヲ相去ラス征鞍山路ヲ分ル日ハ同シク迷フ馬蹄ノ塵軍旅野外ニ屯
ロセハ同シ褥ノ假枕共ニ詠ル夜半ノ月 況ンヤ合戦ノ場迄モ一道ニ
ト志シ諸共ニ進マレシカハ合戦ニヒマナフシテ思ハスモ押隔ラレ清
家終ニ討死ス 一人當千ノ郎等ニ佐藤兵衛武任ト云者彼死骸ヲ肩ニ
掛味方ノ陣ニ引退ク 後ロヲ見レハ宗次ハ卯ノ花ヲトシノ鎧^を着テ

平田三五郎物語の流れ

橋口晋作

筆者は『研究年報』第十七号（平成元年三月発行）に庄内の乱関係軍記周辺の物語『雪折り竹』庄内軍記を紹介した。

「雪折り竹」は冒頭、末尾に男色を称え勧める文章を配した戯作である。その内容も、伊集院忠真方の若衆内村半平と島津大守方の若衆春田主左衛門の「少人道」を描いたものであった。その点では江戸時代の男色文学の一つに過ぎない。しかし、筆者に意外な感動を与えたのは内村半平に先立たれた後、ひたすらに死を求める主左衛門の「死狂ひ」の姿であった。死を求める主左衛門は敵も味方も呆れるような働きをした。

勿論立派な手柄であるが、主左衛門の行動は軍規を外れているので恩賞にもあずからない。又、大守方の勝ち軍の連続で、主左衛門は不本意に手傷さえも負わない。そして、そのまま庄内の乱は終わってしまう。しかも、乱の終結と共に母の死を知らせる手紙が届く。こうして、庄内の乱出陣の間に「二世と契りし児」と「ひとり持たる母」を失った主左衛門はすっかり嘗ての人格をなくし、乱暴な気違いになってしまふ。正気を失った主左衛門は以前放映されたベトナム帰りの米兵を思わせた。遂

に主左衛門は島津義久のお気に入りのお小姓伊地知慶右衛門宮内弁助を殺傷し、切腹を命ぜられる。その見事な切腹も二人の小姓の寝込みを襲ったのが、やはり確実に死ぬ為だったのであろうと思わせた。何とも哀しい結末である。乱後の主左衛門を描いたのは庄内の乱に対する、晴らしようのない怒りの存在を見詰めることになったのではないか。おそらく、その中には島津大守に対する憤りも交わっている。内村半平に先立たれた後を読み続けて、以外な感動に襲われたのは、右のような男色をはなれた、合戦のもたらした不幸の生ま／＼しさであった。

「雪折り竹」がどれだけ読まれたか、残念ながら筆者はそれを示す資料を知らない。内村半平、春田主左衛門の「雪折り竹」に比べて、平田三五郎、吉田大蔵の「少人道」を描いた『賤之麻玉記』は明治によく読まれている。本稿はその平田三五郎、吉田大蔵の物語の成長、展開を作品等を追って眺めてみようとするものである。

—

やはり歴史資料から眺めて行くことにする。『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』（昭和五八年一月発行）所載の九二四、九二五の資料に次の記事がある。

924 右陣取之からミとして、財部口へ人衆少々從爰元指出候処、敵催行_二付、猛芳戦候而各致粉骨、敵四五人討捕候、手負なども多々有之由候、此方_二ハ平田三五郎朝ハ分捕仕、其後遂戦死候、_并宮内式部左衛門同前_二候、吉田大蔵事ハ手負_二而越度申候、謀稠軍_二て候つれ共、